

5.19

■司会 鍵谷剛一郎〈福岡県〉 福岡県立社会教育総合センター 社会教育主事
 永楽 悦子〈大分県〉 大分県教育庁生涯学習課 社会教育主事

1. 有明海総合イベント事業「ガタリンピック」の成果と「フォーラム鹿島」のまちおこし戦略

10:45~11:10

土井 敏行〈佐賀県〉 フォーラム鹿島 代表世話人

ガタリンピックは昭和59年の創設以来、長年の創意・工夫を積み重ねて、有明海の干潟を活用した総合的なイベントに成長している。事業の実施による地域活力の醸成はもちろん、交流人口の拡大、国際交流や修学旅行に活用するなど新しい地平線の開拓にも成功している。異業種が連携した実行組織の「フォーラム鹿島」は、長期継続事業の難点である企画・実行役員の世代交代にも上手に対応し、蓄積された経験と新しいエネルギーを総合的に組み合わせている。キーワードは「プロ市民」育成である。

2. 「火の島太鼓」の13年

11:10~11:35

—人づくりにおける活動の展開と転換、そのタイミング—

竹ノ下武宏〈鹿児島県〉 桜島火の島太鼓保存会 会長

「火の島太鼓」は昭和63年の「国際火山会議」を機に創設されたものである。以来13年、週2回の定期練習は欠かすことなく行なわれ、地元の祭りやイベントに出演し、年間50回をこえるステージをこなしている。最近では外国人メンバーや町外の参加者も増えている。後継者の育成については小・中学生を中心とした「子ども太鼓グループ」が結成され、活動継続の基盤も整いつつある。グループの活動、そこで活動する人々を長期維持していくためには、短期的な方策と長期的方策の組み合わせが必要であることが明らかとなった。

3. 手づくりの「ふるさとミュージカル」

11:35~12:00

—町民音楽祭によるまちづくりの道程—

岡田浩四郎〈鳥取県〉 鹿野町民音楽祭実行委員会 実行委員長

鹿野町音楽祭「手作りミュージカル」は今年で15年を迎える。初めは作曲や演出はもちろん多くの点でプロの手を借りねば実施は困難であったが、経験の蓄積と意欲の拡大に伴って、町民の町民に対する指導が行なわれるなど、文字どおり「手作りの」ミュージカルへと成長してきた。また15年の歳月は音楽祭に関わってきた子どもたちに「ミュージカル効果」を生み出し、成長した子どもたちが演出や大道具づくりに関わりながら次の世代の養成に取り組むようになっていく。音楽祭に直接関わらない町民の理解と協力も一段と広がり、地域の教育力の向上に予想を越えた効果を上げている。

4. 総括討論

12:00~12:30

(第2会場：4F視聴覚室)

■司会 山平 敏夫〈熊本県〉 熊本県教育庁社会教育課 社会教育主事
新納 雅樹〈鹿児島県〉 鹿児島県教育庁社会教育課 指導主事

5.19

1. 生涯学習グループ「やまぐちネットワークエコー」の構築による女性の社会参加促進のプロセスと成果 10:45~11:10

西山香代子〈山口県〉 やまぐちネットワークエコー事務局

活動の拠点は山口県生涯学習センター、出発点は平成元年、「やまぐち女性カレッジ」の修了生が学習と交流を目指して結成した「やまぐち女性の交流会」である。平成5年に全县にネットワークを拡大するため「レディースエコー」として会を結成、さらに男性の入会により「やまぐちネットワークエコー」と改称。目的は男女共同参画。企画実行委員、実行委員を募集して「生涯学習ネットワーク研究会」を実施。朗読劇、ファシリテーター養成講座、アサーティブトレーニング等学習方法も多様である。今後は、県内の目的を同じくする団体や行政、学校とも連携して響きあう共生のネットワークを展開したい。

2. 市民による市民のための生涯学習プログラム「おなかた市民学習ネットワーク事業」 11:10~11:35

赤岩喜代子〈福岡県〉 市民学習ネットワーク事業運営委員会 会長

宗像市で活動が活発に展開されている市民学習ネットワーク事業とは、推薦制のボランティアの指導者による生涯学習システムである。市民が身近かな場所で、自主的かつ相互に学習できるよう、指導者の発掘、養成、指導者と学習者の仲介、情報提供などを行なっている。発足は昭和59年。領域は「趣味・稽古ごと」、「家庭生活」、「スポーツ・レクリエーション」、「教養」、「伝承文化」の5分野である。行政はサポートに徹し、運営はボランティアの委員に一任。学習に限定せず、研修、交流、発表、各種事業への参加・協力などを組み合わせたことが活動継続の主たる要因である。

3. 公民館着付講座の社会還元の方法と思想 11:35~12:00 —「おびの会」ボランティア活動23年の軌跡—

久保田照子〈沖縄県〉 おびの会 会長

「おびの会」の会則には、「沖縄の歴史、文化を学び、それを次代に継承し、ボランティア活動を通して、交流の輪を広げ、地域社会に奉仕する」という複数の目的が列挙されている。「着付け教室」は活動の出発点であり、そこから「学習会」、各種大会の支援を目的としたボランティア活動、「首里城の復元」に関する様々な活動、老人クラブとの交流、着物ショーや「エイサ」を活用した国際交流など実に幅広い実践を積み重ねてきた。着物の着付け学習という「目的集団」を、単一目的のためだけの閉鎖集団に終らせず、異業種活動との連携・交流、社会貢献活動への直接参加に発展させた希有な事例の一つである。

4. 総括討論 12:00~12:30

5.19

■司会 田島 恭子〈佐賀県〉 勸孔子の里 事業担当

松尾 透〈長崎県〉 野母崎町教育委員会社会教育課 課長補佐

1. 公民館を拠点とした学社連携「楽行共育」の試み 10:45~11:10

松島 俊枝〈島根県〉 田井公民館 主事

キャッチフレーズは「公民館は地域の茶の間」である。とにかく人々が立ち寄ってくれない限り公民館の施設機能は発揮しようがない。そこから昼は「喫茶店」、夜は「酒場」から出発し、午後は「児童館」をともなった。人々の参加が増加し、「世代間交流」を目標とした各種の学社連携事業を一年を通して展開した。結果的に、学校の協力と参加も得て、文字どおり地域ぐるみの活動を展開している。コミュニティにおける学社連携の具体的な活動は、出会いの機会を作り、交流を生み出し、遊び心を提供し、最終的に地域を活性化した。人々のネットワークを作ったのは公民館のフットワークである。

2. 「わらべサークル協議会」

11:10~11:35

— 童話によるまちづくりの成果と展望 —

藤野 吉子〈大分県〉 わらべサークル協議会 会長

玖珠町では、日本のアンデルセンといわれた童話の父九留島武彦先生を記念し、毎年日本童話祭が開かれている。そうした文化的風土の中で、各種ボランティアサークルによる「童話の里づくり」が進められてきた。昭和58年に結成された「わらべサークル協議会」は現在24団体、会員約950名を擁し、「子どもと夢を」を合い言葉に、児童文化の向上に関わる様々な活動を展開してきた。平成6年度には「ふるさとづくり大賞」、内閣総理大臣賞を受賞。活動の場としては社会教育施設はもちろん保育園から老人ホームまで多様な舞台を活用し、内容は伝統文化の継承、自然体験、童話を素材として人形劇・お話しなど子どもの関心を掘り起こすべく多様な試みに挑戦している。

3. 長期通学キャンプの教育効果と学社連携の方法

11:35~12:00

九野坂明彦〈福岡県〉 庄内町立生活体験学校 社会教育主事

少年問題の根本は生活体験の希薄化であるという観点から、体験の「場」を補完する「通学合宿」という方法を開発して年間20回実施している。当初はキャンプ場から通学するという形態であったが、昭和63年から「生活体験学校」という拠点施設を設置して、より総合的・多角的な体験プログラムを継続している。類似のプログラムは、平成11年度現在、全国153ヶ所で行なわれているが、庄内町の実践はその方法論上の原型モデルを提示したものである。

4. 総括討論

12:00~12:30

(第4会場：2F自由研修室)

■司会 山中 慎嗣〈島根県〉 島根県教育庁生涯学習課 社会教育主事
森崎 伸一〈長崎県〉 長崎県教育庁生涯学習課 係長

5.19

1. 自治公民館拠点主義の生涯学習まちづくり事業における「生涯学習推進員」の機能と役割

10:45~11:10

森山喜代香〈宮崎県〉 綾町教育委員会 教育長

自治公民館拠点主義とは区長制度の変革を出発点にしている。綾町は昭和40年区長制を廃止し、自治公民館連絡協議会を結成した。以来、自治公民館は行政の下請け・支援組織であることを改めて、みずからの地域づくり、住民の交流、健康づくり、青少年の育成、生涯学習の推進など地域自治に専念することとなった。特に、生涯学習は自治公民館役員体制の中に「生涯学習推進員」を選任して推進し、綾町の手作り文化の数々を創造したのである。年間観光客は120万人。首長が選ぶ元気な自治体では「西の横綱」、全国花の町づくりコンクールでは最優秀賞を受賞。「モデルにしたい町」では第2位の栄冠に輝いている。

2. 郷土芸能「神楽」の若者への継承による愛郷心の形成と家学社融合の実践

11:10~11:35

中越 拓平〈高知県〉 檮原町教育委員会 教育長

高校生の地域活動として郷土芸能の「神楽」を導入し、若い世代による文化の継承と郷土愛の育成を目指して既に20年以上の実績を積み上げてきた。結果的に「家庭」・「学校」・「社会教育」の連携・融合が推進され、他の地域や学校に対しても良い刺激となっている。神楽の活動を通して培われた郷土愛や連帯感は若者の人格形成に多大の成果をおさめたばかりか地域の活力を醸成する点でも貢献が著しい。

3. 南阿蘇広域事業の展開と六ヶ町村連携の成果と意義

11:35~12:00

秋山 清二〈熊本県〉 高森町教育委員会 社会教育係長

昭和46年「南阿蘇はひとつ」をスローガンに広域事業が始まる。南阿蘇をひとつの文化圏、生活行動圏ととらえ、事務・経費の軽減と多様な学習要求への対応を目的として「南阿蘇生涯学習推進連絡協議会」を設立。運営は町村による「負担金」方式を取り、基本事業は、「阿蘇六ヶ町村勤労青年国内研修」、「南阿蘇セミナー」、「南阿蘇六ヶ町村少年少女国内研修」、「南阿蘇中学生海外研修」、「体力づくり阿蘇南部大会」、「南阿蘇生涯学習推進連絡協議会」の6分野である。

4. 総括討論

12:00~12:30

5.19

■司会 比嘉 清美 <沖縄県> 西原町子ども会育成協議会 役員
石川 順雄 <広島県> 広島県立生涯学習センター 専門員

1. 総合型地域スポーツクラブによる地域の活性化と青少年健全育成

13:30~13:55

加藤 典紅 <鳥取県> 北条町体育指導委員
平成10年度チャレンジデーへの参戦を機に総合型スポーツクラブの導入へと発展した。
平成5年に設立された(財)北条町スポーツ振興事業団を核とし、住民主導型の生涯スポーツを通して、青少年の健全育成に資する事はもとより高齢者の健康、地域の活力の向上を目指した町づくりを目的としている。

2. 青年の自己啓発と地域再生活動

13:55~14:20

-CYFからCYCへ-

白岩 修 <宮崎県> 木城町教育委員会社会教育課 主事
CYFとは「地域ユースフォーラム」の略であり、CYCとは「地域ヤングサークル」の略である。CYFは平成8年度から、CYCは平成11年度からの事業である。ともに宮崎県内の市町村に委託をして、青年の自己啓発と組織の拡充を図るため学習と発表の機会を提供するための事業である。CYCでは市町村の境界を越えた広域の青年活動の振興策であり、最終目的は青年の活力を引き出すことによって地域を活性化することである。木城町では「木城若者会青年塾」の事業名称の下に、「夜なべ討論」、「マウンテン・バイク耐久レース」、「クリスマス・イルミネーション点灯式」、「町内青年交流会」等が実施された。更に広域の「地域ヤングサークル」の活動では、地理的条件の共通性に着目した市町村のグループ編成を行ない、スポーツやカート体験等を活用した合同の交流会を開催してきた。交流の深化はもちろん、イベントの定例化、新規事業の創設等成果は著しい。

~ ティータイム ~

14:20~14:55

3. 地酒「中山郷夢語」の全国共同創作によるジゲおこし

14:55~15:20

なかやまのさとゆめかたらい
畑 千恵子 <鳥取県> 地酒「中山郷夢語」 発起人
平成6年度以来、酒米「五栄」、酒米「強力(ごうりき)」の発掘・使用によって創造の「地酒」：「中山郷夢語」を通じた地域起こしの活動を続けている。実行委員会は「稲穂の会」。田植え、稲刈り、新酒発表などの催しには、地元ボランティアはもちろん全国各地から多数の参加者を得るようになった。米づくりは「無農薬合鴨農法」、酒作りは二月の「新酒」、6月下旬の「夏酒」、11月の「冬の酒」という三つのバージョンを提供している。今後の課題は人的ネットワークの輪を広げる事、耕地面積を広げて「中山郷夢語」の生産を拡大し、地域活性化の貢献度を高める事である。

4. 県境(福岡県・大分県)を越えた生涯学習広域講座の方法と成果

15:20~15:45

刀根 伸 <福岡県> 福岡県教育庁京築教育事務所 主任社会教育主事
出発点は平成9年度「豊築・中津地区コミュニティ会議」の結成である。そこから「豊の国地域ブロック学習事業」が生まれ、現在の福岡県側の「京築学びの森推進事業」に繋がってきている。対象地域は福岡県京築地区と大分県中津・宇佐・下毛地区という二つの県にまたがっており、17市町村に及ぶ。当然、活動の中心組織もそれぞれの地区に存在し、基本理念は共通文化圏における県境を越えた連携である。事業の実施にあたっては市町村が基軸となり、民間の社会教育団体、病院、及び大学を含む地域内の各教育機関等と連携し、多様化した学習要求に対応する工夫をしてきた。今後の課題は、連携のコーディネート機能のあり方、連携の範囲と意義の再確認など広域であるが故に生ずる問題の処理である。

5. 総括討論

15:45~16:15

6. 特別報告(4F大研修室)

「生涯学習実践研究20年の総括」~日本文化における知的風土の変革~

三浦清一郎 (社会教育・生涯学習研究者)

16:30~17:00

(第2会場：4F視聴覚室)

■司会 田原 智子〈広島県〉 広島県立生涯学習センター 主任

鶴本 秀明〈大分県〉 大分県教育庁佐伯教育事務所 社会教育主事

5.19

1. 楽修会と町内ものづくりマップによるまちづくり交流 13:30~13:55

— 地域アニメーターの実験 —

麓 宏吉〈鹿児島県〉 始良町教育委員会社会教育課 公民館指導員

地区公民館を拠点として「楽修会」構想による月例会を実施してきた。また、こつこつと地域のものづくりに励んできた人々の人材マップ（「あいあいマップ」）の作成を通して、子ども会活動の支援など地域の活性化に取り組んでいる。人材マップに登場した人々の意欲の向上、子どもたちの積極性の向上が観察されている。今後の課題はそれぞれの人材の個性を生かした活用方法の開発、他の市町村との交流プログラムの創造である。

2. 星ヶ窪ハイキングの歴史と交流イベントの総合化 13:55~14:20

— 仁淀村生涯学習村むらおこし事業の新戦略 —

坪内 武則〈高知県〉 仁淀村教育委員会 主監

星ヶ窪とはむかし隕石が落下して、そのくぼ地に水が溜まって池となったところである。15年の歴史をもつ星ヶ窪ハイキングを中核として、各種団体の手作りイベントが定着してきている。平成12年度は、生涯学習事業として、「熱気球の体験遊覧」、「青空コンサート」、「子ども対象の各種の体験教室」、「カラオケ大会」など広域的なイベントが実施され、事業効果の波及範囲が拡大している。

~ ティータイム ~

14:20~14:55

3. しまばら^{しらぬいれん}不知火連「ガマダス阿波踊り」による地域活性化の戦略と成果 14:55~15:20

廣瀬 朗〈長崎県〉 しまばら不知火連 連長

しまばら不知火連は平成6年島原商工会議所青年部を中心に結成された阿波踊りグループ。現在連員55名。「ガマダス阿波踊り大会」事業の発端は、平成4年「阿南・島原元気塾」で披露された徳島県阿南市役所ささゆり連による阿波踊りの感動、阿波踊りの贈り物を雲仙噴火災害時の支援の象徴と捉え、感謝の記憶を風化させない事、阿波踊りを楽しく踊る事、広域の参加者を獲得して、交流人口の拡大をはかる事など複合的な地域活性化戦略の視点にたって事業を進めている。5回の大会を経て地域への浸透も深まり、資金の助成など協力体制も整いつつある。

4. 「竹笛」人材の活用と竹笛演奏グループによる地域活動の創造 15:20~15:45

米須美佐枝〈沖縄県〉 西原町中央公民館・西原町平園自治会 社会教育指導員

公民館が発掘した竹笛演奏家による子どもの音楽指導の経験と技術を地域子ども会の活動プログラムに活用し、子ども会活動の活性化に成功している。子どもたちの活動は竹笛の手作り・創作から挑戦を始め、チーム演奏のわざを学び、練習の成果も上がって、かずかずの催しに参加・出演が出来るようになるまで成長した。準備過程における親子による参加はわが子との絆を深めることはもちろん、子ども会の保護者と地域の他の子どもたちとの交流も巧まらずして拡大している。子どもたち自身は竹笛演奏活動が関係者の評価を受けることによって自信が持てるようになり、音楽に対する感性を磨いている事も疑いない。

5. 総括討論 15:45~16:15

6. 特別報告（4F大研修室）

「生涯学習実践研究20年の総括」～日本文化における知的風土の変革～

三浦清一郎（社会教育・生涯学習研究者）

16:30~17:00

5.19

■司会 其山 守美 <鳥取県> 西部教育事務所 社会教育主事

池田 博文 <福岡県> 福岡県教育庁南筑後教育事務所 社会教育主事

1. 地域人材の活用による寺子屋教室とカルチャー教室の実践

13:30~13:55

廣瀬 武史 <熊本県> 小川町立小川小学校 教諭

総合的な学習の時間のカリキュラムを充実するため、地域の人材を活用した開かれた学校づくりに取り組んできた。地区公民館の協力を得て、地域の人々との交流を目指した「寺子屋教室」、地域の方々の支援による「カルチャー教室」を創設した。地域との交流を通して、子どもたちの地域認識が変わり、同時に地域の方々の学校への関心が向上している。地域の教育的協力を定着させるための「小川教育ネットワーク」の充実がこれからの課題である。

2. 創作ボランティア「はまゆう生活学校」の学校支援活動

13:55~14:20

三原キクエ <大分県> はまゆう生活学校 会長

はまゆうは海浜に位置する蒲江の町花である。はまゆう生活学校は昭和62年に開始され、ヒオウギ貝、アコヤ貝などふるさとの自然素材を細工・活用したボランティアの創作・学習支援活動である。活動の範囲は自分達の創作活動を越えて、近隣の学校の活動支援などにも拡大し、生活学校に対する人々の理解と評価も高まり会員の拡大にも成功している。

~ ティータイム ~

14:20~14:55

3. 地域集団のネットワーク化と人材活用による学社融合

14:55~15:20

徳永 惣一 <熊本県> 玉東町学社融合推進実行委員会事務局 (社会教育課長補佐)

地域の教育資源の有効活用を図り、学社融合の体制を組織地域の人材の支援を受けて、町の史跡を活用した西南の役に関する歴史学習、福祉施設の協力を得た体験活動など子どもたちがみずから実践するプログラムの創出を工夫。また、子どもたちの活動成果を住民に発表する機会を設けたことが、地域住民の学社融合方針の理解を促進すると共に、子どもたちの活動の自信に繋がっている。

4. 車椅子バスケットを通じた学社融合の取り組み

15:20~15:45

寺田れい子 <広島県> 車椅子バスケットボールクラブ鯉城 マネージャー

広島県車椅子バスケットボールクラブ(現在6チーム)は昭和55年の結成。広島市中心身障害者センターを中心に広島市、府中町の各学校で障害者と健常者の交流を目的として、車椅子バスケットを起点とした学社融合プログラムに取り組んでいる。少人数で行なわれる車椅子バスケットはスポーツの楽しみを通して確実に子どもたちの障害者理解を深化させている。今後の課題は子どもたちのスポーツ交流成果を保護者及び教師の認識の深化につなげていく事である。

5. 総括討論

15:45~16:15

6. 特別報告(4F大研修室)

「生涯学習実践研究20年の総括」~日本文化における知的風土の変革~

三浦清一郎 (社会教育・生涯学習研究者)

16:30~17:00

(第4会場：2F自由研修室)

■司会 熊田 光男 <高知県> 東津野村教育委員会 社会教育課係長

芦村 伸也 <熊本県> 熊本県教育庁玉名教育事務所 社会教育主事

5.19

1. 有明佐賀航空少年団「心の成長プログラム」

13:30~13:55

ー親切・勇気・礼儀・感謝をいかに育むかー

横尾 寛二 <佐賀県> 有明佐賀航空少年団 幹部団員

(財)日本航空振興財団を母体とし地域・後援会・ボランティアの支援による古くて、新しい「第三の少年教育の場」を模索する事業である。活動の範囲は有明佐賀空港を中心とするが、参加者は佐賀県内外から募集している。活動の内容は子どもたちの心の成長に焦点をあて、親切、礼儀、勇気、感謝など徳に関する指導を重視している。初年度の参加者は49名、平成13年度は60名、年6回の活動を予定している。

2. 自宅開放型「よろず相談・学習会」：「座・いきだよ会」の28年

13:55~14:20

正 <にかく大分県> 座・いきだよ会 主宰

「座・いきだよ会」は、地域の人々に自宅を開放した「よろず相談・学習会」を始めて28年の歴史を積み重ねてきた。幼児から高齢者まで来訪者はあらゆる年齢層に亘っている。相談・学習が目的としてきたところは「自己の発見」であり、ボランティアを始めとする様々な活動への積極的な参加である。相互学習と参加者の交流はいじめによる不登校の解決など具体的な成果を生み出している。

~ ティータイム ~

14:20~14:55

3. 飯干太鼓アラスカ演奏交流 -13人の子どもたちの挑戦-

14:55~15:20

椎窓 猛 <福岡県> 矢部村教育委員会 教育長

飯干太鼓のアラスカ渡航体験は「出会いの縁」を生かした13人の子どもたちの奮闘記である。出会いを生かすことが出来たのは、矢部村飯干小学校の13人の子どもたちの太鼓の実力である。指導者は地域に伝わる歴史の伝承を掘り起こし、太鼓のリズムに翻訳してそれぞれに異なる13人の子どもたちに上手に持ち分を配分した。練習の甲斐あって、太鼓は一定以上のレベルに達し、内外の訪問者を一様に感動させたのであった。最終的にはアラスカとの縁が実り、村の財源獲得の奮闘も実って、アンカレッジのサンドレーク小学校他への訪問が実現した。矢部村の子どもたちが異質の文化に飛び込み数日を経て、その異質を学習し、異文化になじんでいく過程はまさしく国際交流の不思議と秘密を十分に物語っている。

4. 日豪山村ホームステイ交流による国際理解学習の衝撃効果

15:20~15:45

向野 茂 <大分県> 院内国際交流会 副会長

1992年以来、活動の基礎組織である「院内国際交流会」の会員が順次オーストラリアのFalls Creek小学校へ日本語教師として赴任。1998年より相互に教育交流団を送る。目的は日豪ホームステイ交流と小学校での共同学習。ホームステイ交流はホストファミリーの創意・工夫で多種多様。オーストラリアの先生方も町内の小学校で教壇に立つなど受け入れ側の対応も多くの実験を含んでいる。成果は、ホストファミリー及び子どもたちの国際理解の推進、英語学習への関心の増大、課題は、ホストファミリーを志願する家族数の拡大、訪豪グループの引率要員の確保である。

5. 総括討論

15:45~16:15

6. 特別報告(4F大研修室)

「生涯学習実践研究20年の総括」～日本文化における知的風土の変革～

三浦清一郎 (社会教育・生涯学習研究者)

16:30~17:00